

バリ島におけるリゾートホテルと地域文化

桑 原 季 雄

はじめに

山下によれば、今日の日本の観光パンフレットの大きな特徴の一つはホテル・ツーリズムと呼びたくなるような情報の満載であるという。「ホテルはグレードづけられ、バリに行ったかどうかではなく、どのホテルに泊まったかが問題となる。その意味では選ばれるホテルはブルデューのいう「ディスタクシオン」、つまり差異化を表明する基本的な媒体になるのだ」(山下 1996:39)。このように、バリの観光は一面でホテル観光の様相を持ち、どこのホテルに宿泊するかによって「差異」が生じ、それが観光経験の多くを決定する。これまで人類学的調査においてばかりでなく最近の観光人類学的研究においてもリゾートホテルそのものがその人類学的の研究対象になることはほとんどなかった。それは一つには、リゾートホテルが地域社会から孤立して世界の資本主義的市場経済と直結し、人類学が求めてきた「真正の文化」が発現する場から最も遠い所にあり、地域文化との関わりが薄いと見られていたからであろう。しかし、最近の新しい傾向として、一部のリゾート系ホテルグループは、バリの文化をよく理解し、またホテルグループのオーナー自身がバリ人であったりして、従来の外資系のリゾートホテルとは違った趣向でホテルへのバリ文化の巧みな取り込みを行っている。さらにリゾートホテル自体がバリの地域社会と連携しながら特にバリの精神文化を体験できる場を志向している。今日のバリの観光のもう一つの型はホストにとってもゲストにとってもまさにホテル観光の周辺に展開しているように思われる。

本稿では、こうしたバリのリゾート観光の現状を踏まえて、リゾートホテルの発展という視点からバリ島の文化観光の歴史の簡単なスケッチを試み、特に

戦後のインドネシア政府の観光政策の目玉であったバリ島南部のヌサドゥアの巨大リゾートホテル群の開発の経緯やその後の展開について述べる。さらに、南部ジンバラン地区や中部のウブドを例にリゾートホテルと地域社会、地域文化との緊密な関係についてふれ、バリの文化に忠実であろうと試みるいくつかの新しいタイプのリゾートホテルによるバリの文化様式の巧みな商品化について考察する⁽¹⁾。

1. バリの文化観光とリゾートホテル

バリの文化と観光や「文化観光」についてはすでに多くの研究があり（山下1992, 1993, 1996; 吉田（竹）1997, Picard 1993, 1996), ここであらためて繰り返すことは避けるが、リゾートホテルの誕生と発展という観点から簡単にその歴史を眺めてみたい。

バリの観光化とオランダ植民地支配との深い関わりについては永淵（永淵1998）によってすでに詳しく指摘されている。それによると、バリの観光化の幕開けはオランダ植民地時代の開始とともに始まったのだ。オランダはバリを軍事制圧した1908年に、蘭領東インドを観光目的地として売り込むためにバタビアに政府観光局を開設したが、当時のバリ島はまだヒンドゥ・ジャワ文明の「生きた博物館」と見られていたにすぎなかった。観光客にバリの門戸が開かれたのは1914年である。この年、バリではオランダ植民地政府によるバリの軍事平定が終了し、文民政府が占領軍に取って代わり、これによって、スラバヤからの船の寄港が可能になった。バリに上陸した観光客は馬か車で島内を周遊し、植民地行政官の現地視察の際の宿泊施設となっていた政府のレストハウスに滞在した。しかし本格的なバリの観光化は、1924年に王立定期航路会社（KPM）がバタビア、スラバヤ、マカッサルとバリ北岸のブレレン（シンガラジャ）港を一週間で結ぶ定期船の就航によって具体化された。ブレレンには観光局代理店が置かれ観光客のために英語を話せるガイド付きのタクシーの手配やレストハウスの宿の手配を代行した。金曜日の朝到着した観光客は、日曜の夕方マカッサルからの同じ船に乗って戻るまでの2泊3日間、自動車でバリ島を足早

に周遊したのであった (Picard 1996:24-25)。

しかし、当時、観光客が宿泊できるホテルはほとんどなく、オランダ植民地政府は当初は植民地行政官用のレストハウスの使用を観光客に許可することで対応していた。1928年になってようやくデンパサールに、それまでのレストハウスに代わってバリホテルがオープンした。バリホテルは王立定期航路会社によって建てられたのだった。続いてキンタマーニのレストハウスがバトゥール湖観光の観光客専用のバンガローホテルに改修された。

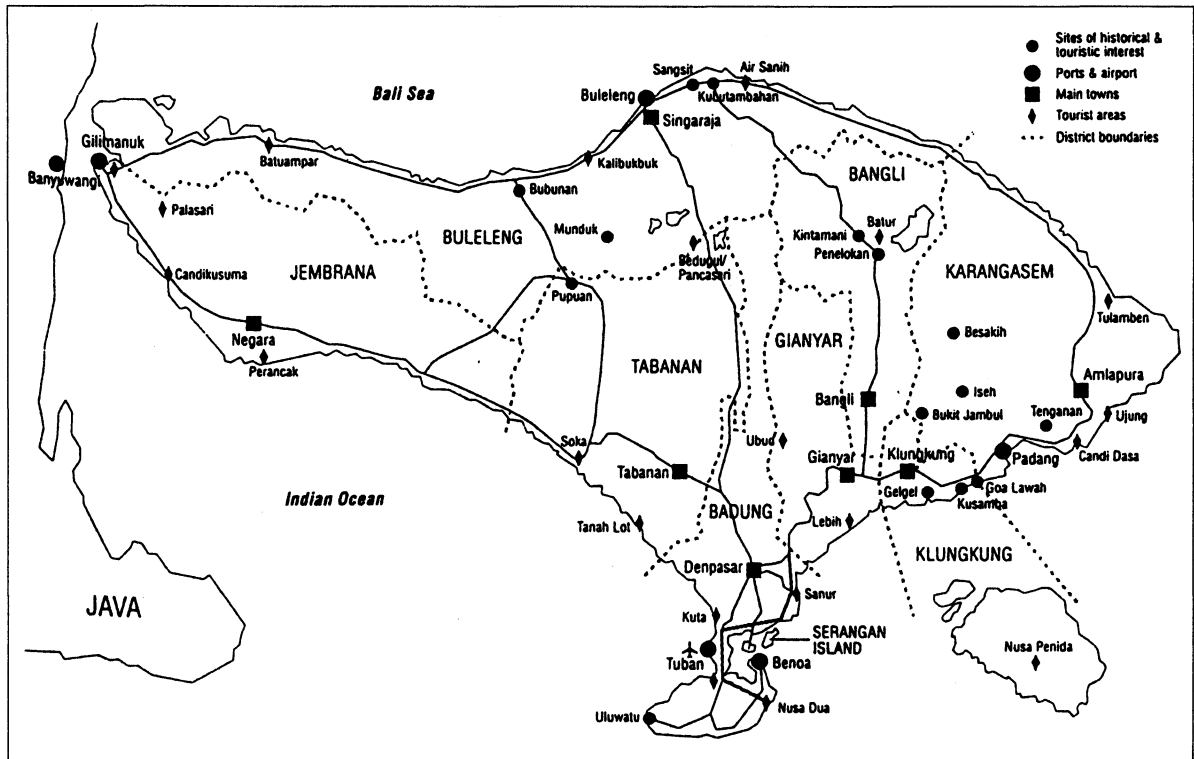
1920年代末までに、週平均4便の船が入港するようになった。1934年には、バリ島西端のギリマヌクとジャワ島東端のバニユワンギを結ぶ定期フェリーが毎日運行するようになった。また1933年以降、スラバヤとバリの間に航空路線も開設され、デンパサールの近くにトゥバン空港が開港し、週3便運航された。

観光局による最初の統計によれば、1924年の観光客数は213人であったが、1929年には1,428人と、その数は着実に増えた。その後、経済不況の影響で来島者は何年間か低迷したが、1934年になると、観光客数は再び増加に転じ、1930年代末にかけて平均約3,000人の来訪者があった (ibid. 1996:25)。

戦前のバリのホテルの収容能力はダブルの部屋で70室であった。その内訳は、バリホテルが48室、サトリアホテル (1930年代初めにデンパサールに建てられた中国人のホテル) が16室、そしてキンタマーニのKPMのバンガローホテルが6室であった。その他、島内8つのレストハウスでダブルの部屋がさらに32室利用可能であった。アメリカ人経営のクタのいくつかのバンガローも利用できた (ibid. 1996:25)。

稲垣は、観光学という立場からバリのリゾートホテルの観光表象の変遷を分析し、バリのホテルの建築様式において、コロニアル、インターナショナル対バリの伝統的建築様式、場所性の重視といった二項対立的構造が、3度繰り返されてきたことを指摘する。それによると、その最初は30年代であり、白壁にコロニアルスタイルの瓦をのせたバリホテルに対して、アメリカ人のコーク (Koke) 夫妻は地元のコテージタイプの建築様式を取り入れて茅葺きのクタビーチホテルを建てた。その建築方法は、レンガでコテージの土台を造り、木で骨

地図1 バリ島全図



(Picard 1996:39)

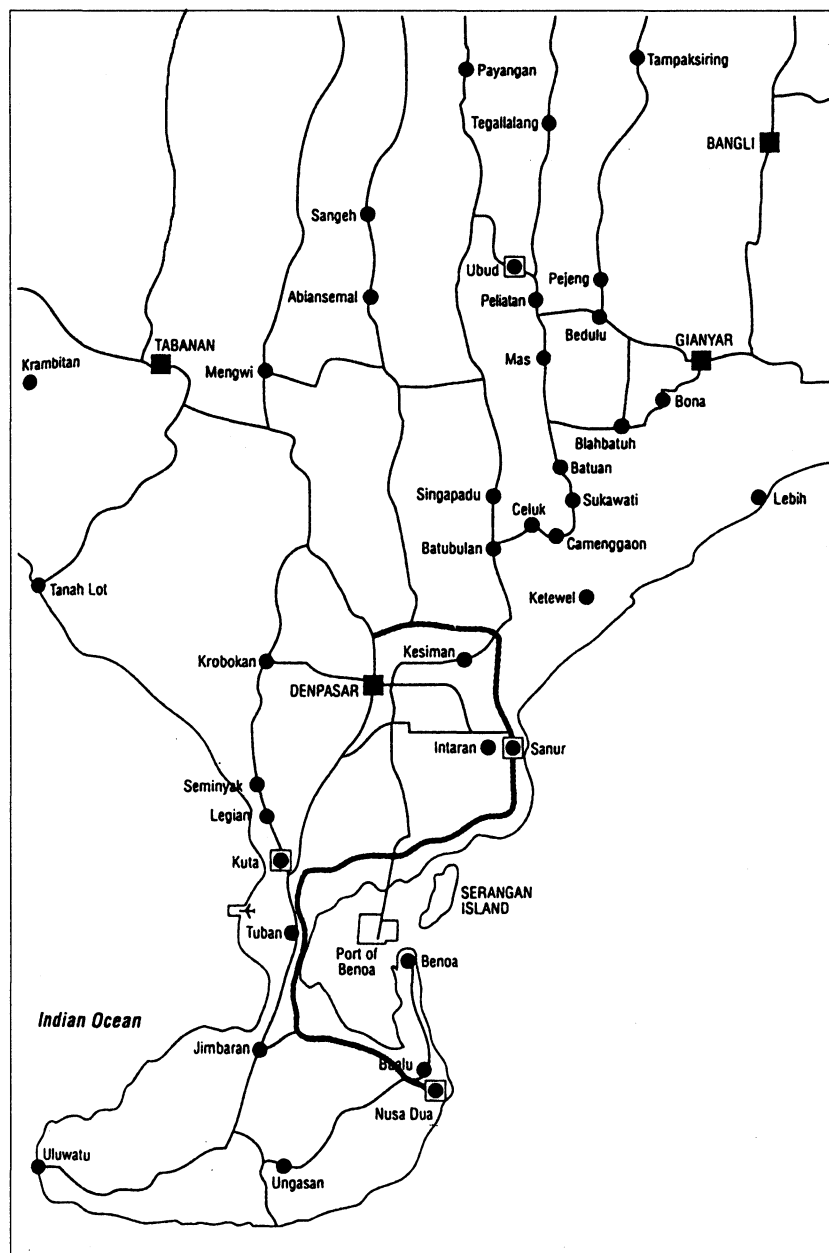
組みをくみ、アランアランという草で屋根をふき、竹を編んだパネルで壁を造り、出来上がった各パーツを竹製の細い紐でつなぎ合わせるものだった。この建築様式は、現在のバリのリゾートホテルの原型となっている。バリのホテルの歴史的特徴はこのときから始まったとされる（稲垣 1998）。

2. バリ観光開発のマスタープラン

バリの観光化の歴史はリゾートホテルの発展の歴史と重なる。特に戦後のバリのリゾート開発の歴史は伝統文化の保護か、それとも観光化による経済発展かで大きく揺れた歴史でもあった。このインドネシア独立後のバリのリゾート開発の歴史をみてみよう。

外国人観光客を惹きつけるため、バリ島の名声を利用しようとして、ジェット機が離発着が可能なトゥバン国際空港の建設に着手し、サヌール海岸に日本の戦争賠償金によって豪華なバリビーチホテルを建設したのはスカルノ大統領であった。バリビーチホテルは、奇しくもスカルノ大統領が政変で失脚しイン

地図2 バリ南部拡大図



(Picard 1996:67)

ドネシアが世界に門戸を閉ざした1966年に完成した (Picard 1996:42-43)。母親がバリの出身であったスカルノ大統領は、バリをお気に入りの静養先にし、賓客には必ずバリに立ち寄ってもらうようにした。しかし、1960年代末までバリの国際観光は、インフラの未整備や荒廃した経済状態、政治不安、政府の外国人に対する警戒心などから、それほど観光客を惹きつけるには至らないまま

推移した。

インドネシアがスハルト大統領による「新秩序」政策のもとで再び国際社会に開かれたのは1967年であった。そしてングライ国際空港の開港日の1969年8月1日はバリの国際観光が再開された日であり、まさにバリのマスツーリズム元年であった (ibid.:43)。

1969年、国家開発計画委員会は25年以内にインドネシアの経済的離陸を意図して「開発5カ年計画」を開始した。第1次5カ年計画(1969-1974)では、インドネシアの経済発展の要因としての国際観光の重要性が強調され、観光政策の土台が敷かれた。第1次5カ年計画はインドネシアの最良の財産が植民地時代から受け継いだ「楽園」としてのバリのイメージにあることを認め、バリ島をインドネシアのショーウインドウにし、バリ島の国際観光開発を最優先することを提案した。バリはインドネシア群島の将来の観光開発のモデルとしての役割を与えられたのである。

観光は環境をそれほど破壊することなく外貨を稼ぎ、開発やインフラ整備を促進し、毎年労働市場に参入してくる約200万の若者に雇用を与えることによってインドネシア国民に利益をもたらす産業とみなされた。さらに、世界におけるインドネシアの肯定的な認識の促進に寄与するものとしても考えられた。

1969年3月、インドネシア政府の要請によってインドネシアを訪れた世界銀行の代表団は、バリの観光開発のためのマスタープランを作成するよう提案した。それを受けてインドネシア政府は早速バリのマスツーリズムの成長を促進するプランの国際的入札を行った。その結果、多くの様々な国際グループの中からフランスのコンサルタント会社「フランス海外領土観光施設中央協会」(SCETO)が落札し、インドネシア政府はSECTOにバリ国際観光開発プログラムの考案を委託した。SCETOは1970年4月に、国連開発プログラムの資金提供を受け、世界銀行の援助の下、マスタープランの作成に着手し、ちょうど1年後の1971年4月に「バリ観光開発のマスタープラン」として6巻からなる計画書を刊行した。これは1974年に世界銀行によって改訂された後、その監督下に施行された。

マスタープランの目玉は自足的な国際級のメガリゾートコンプレックスの建設にあった。マスタープランが選択した場所はバリ島南端半島部東側のヌサドゥアの海岸線に沿った425haの土地であった。SCETOはそこをリゾート開発し、豪華なビーチ・エンクレーブ（飛び地）をつくって観光客をそこに収容することを提案した。マスタープランは、富裕な西欧人観光客が2、3日ビーチで休日を過ごすためにバリにツアーでやってくるということを想定していたのだった。

フランスのコンサルト会社が直面した最大の問題は、バリの豊かな文化と自然環境を損なうことなく観光開発するにはどうしたらいいかということであった。結果として、コンサルト会社は観光リゾートをバリ人居住地から遠く離れた所に隔離することによって観光の前線のインパクトからできる限りバリの文化を守ろうとした。しかし、バリ観光の最大の呼び物は生きた伝統文化との接触の可能性にあったので、コンサルト会社はバリの生活様式の最も典型的なものを見せてくれる地域を通過する観光周遊ルートを作る必要があると判断した。マスタープランを規定した原則はその伝統文化を保護することによって、バリの観光の持続的発展を保証することであった。かくして、バリの観光は滞在的、収容的な「シーサイド観光」と巡回的、拡散的な「文化観光」に2分された。伝統的な型にとらわれない観光客向けのダンス公演も奨励された (ibid.:46)。

マスタープランの作成は市場調査に基づいてなされた。それによると1985年までには734,000人の観光客がバリにやってくることが予測された。観光客は豪華なホテルに平均4日間滞在し、一日あたり約\$35出費するとみられた。SCETOは、この潜在的需要に対応するために、バリ全体で9,500室を用意する必要があると提案した。その内訳は、バリ島南部の半島東岸部ヌサドゥアに6,950室、残り2,550室をサヌール、クタ、デンパサールにつくるということであった (ibid.:45-46)。

マスタープランは1971年4月の刊行の翌年、大統領令によって採択され、1973年12月にバリ州議会によって批准された。世界銀行は、外国人コンサルタ

ントで人類学者のレイモンド・ノロンハに、バリ社会への観光のインパクトを調査するよう依頼した。しかし彼の評価はかなり批判的なものだった。ノロンハの報告を受けて、世界銀行の調査団がバリに赴き、1974年5月にその査定の結果を刊行した。それによると、世界銀行はバリの観光開発の展望に関してSCETOよりもかなり控えめに評価していた。世界銀行の報告は、1973年の95,000人の外国人観光客の予測で始まって、1978年には290,000人、1983年には540,000人の来訪者があることを想定した。また、観光客の平均的出費は\$46で、滞在日数は3.5日と推定された。ヌサドゥア・プロジェクトの大筋は維持されたが、1985年までに建設される国際級の部屋数は2,500室に制限された。サヌール、クタ、デンパサールに建設されるホテルの部屋数も1,600室に下方修正され、合計4,100室の国際級の部屋が1985年までに準備されることになった (ibid.:48-49)。

3. ヌサドゥア

マスタープランによってリゾートコンプレックスに提案された場所ヌサドゥアは、バリ島最南端東側ののまっすぐにのびた海岸部分で、その地名は地元でヌサ・ドゥア（「二つの島」）と呼ばれてきた海岸に接合する2つの小島に由来する。

この場所はバリの中心部から隔離されかつ空港からも遠くないのでマスタープランの立案者にとってはまさにうってつけの場所であった。半島部の晴れわたった気候やココナッツしか繁茂しない砂地の土壌もビーチリゾートには有利であった。隣接する村ベノアの天然の港はマリンスポーツと娯楽的なクルーズだけでなく国際船が入港する重要な港にもなった。ヌサドゥアの北およそ20キロメートルの所にある州都デンパサールはサービス・タウンとして発展した。ヌサドゥアは高速道路によって国際空港やデンパサール、バリ周辺の主要な地域と結ばれた。

マスタープランは巨大プロジェクトであった。425ヘクタールの敷地は12の区画に整地されホテル開発業者にリースされることになった。計画にはホテル

